

勝林寺之報

憶念弥陀仏本願 弥陀の智に帰しぬれば
自然即時入必定 不退のくらい自然なり
唯能常称如來号 たゞよくつねにみ名となえ
応報大悲弘誓恩 ふかきめぐみにこたえかし
と同時にこの部分は、「正信偈」全体の中心か
なめといつてよい部分です。

「正信偈」は全部で百二十句ですが、こゝは
その丁度は確かに当ります。しかもこの部分
は「信心正因」（私がほとけしましていたと
くただ一つの因は信心）「称名報恩」（信心ひ
とつで往生が定まつたとは、たゞ如来さまの
おめぐみをあおがせていたくばかり）とい
言わば浄土真宗の旗じるしがかよげられてあり
ます。

そういう意味でここは「正信偈」の中心眼目
なのです。

「憶念」とはここでは信心のことです。阿弥
陀さまのご本願は、だれあろうこの私のために
あつたと目がさめたならばということです。

「自然」とはここではジネンとよみます。「
おのづからしからしむる」という意で、如來さ
まの光といのちの中につつまれてあつた私と氣
づいたならば、私のすることはからうことも
何もいらぬ、そのときそのまま（即時）自然に
如來さまと等しい「正定解脱のくらうに入れる
のである。

如來さまのいのちのなかに、すでに生れかわ
つたならば、もうそのあとは、如來のおよび声
念仏でもつて私も如來様を南無阿彌陀仏とよん
で、たゞたゞ、私と共にいてくださつた如來様
の、一心ひと子じの歎心のご恩を、もつたない
いと仰がせてもらうばかり。

子生徒。一週間近くも意識がもどりませんでし
た。私が見舞つた時も眠つていながら突然うわ
ごとのようなことをさけんでいました。人はだ
れも、もうだめだと考へいましたが、おかあさ
んはその間一睡もせずにその子を抱くようにし
て名前をよび通しでした。

奇跡的に一週間目に高校生はよみがえりまし
た。下校の途中に交通事故にあつた高校一年の男
子生徒。一週間近くも意識がもどりませんでし
た。私が見舞つた時も眠つていながら突然うわ
ごとのようなことをさけんでいました。人はだ
れも、もうだめだと考へました。おかあさ
んはその間一睡もせずにその子を抱くようにし
て名前をよび通しでした。

かれは言つていました。

ずつとずつとほんか向うから自分をよぶ声が聞
こえているようでした。その声が、だんだん近
く聞えるようになるには随分かかるような気
がします。やがてその声が、おかあさんの声だ
とわかつたら、それからはスーとあたたかい気
分がたちまち帰ってきたようでした。気がつい
たらそこに母がいました。やつぱりぼくは、こ
のおかあちゃんから生れたんだなんて思つて
しまいました。

てれくさそうに彼はそのようにそのときのこ
とを教えてくれました。

および声が聞えて如來さまと出合えたよろこ
び。それを「信心」といいます。ただそれだけ
で如來さまの家に生れる身になつたのです。そ
れからの人生は、如來さまのいのちのなかで、
もつたない日ぐらしを元氣いっぱい生きさ
ります。

本堂がはちきれるほどお参りいたしまし
た。

若い人に 病が なおる ように
死なない ように なる こと が

「利益」ではない。

老を 病を 死を

ほんとの 「利益」 の だ。

人生の先端でありお念佛の道の先達であるご門
徒のお年寄りと、年に一度でも共々におみのりを
聞き勵まし合いたいと始めさせていたゞいたこの
報恩講です。いつものようにバスがお迎えに参
ります。仏婦で心から「おとき」も用意しま
す。

別修「報恩講」へ お参り下さい

十月のこよみ

勝林寺テレホン法話開局

出石組「巡研」(長寿寺)

玉田会報恩講(西オキ)

「連研」講師研修会(神戸)

相生市願智寺法事

前住職三回忌法要

相生市光明寺改修落成法要

大引きましょ。

十二日 神戸市応聲寺報恩講

十三日 同寺永代經

十六日 但馬三組合同住職寺族研修会

森久吉氏五十回忌法事

十七日 但馬プロック組顔変更検討委員会

十八日 兵庫教区佛教婦人会迎醍醐部研修会

十九日

二十日 竜野市淨迦寺結婚式

二十二日 西宮市西福寺説教

二十三日

二十四日 仏社ソフトボール大会

二十五日 別修敬老報恩講(仏社・仏婦)

二十六日 テレホン法話研究会(大阪)

二十七日 兵庫教区同朋運動研修会

二十八日

二十九日 永井誠一氏宅法事

三十日 湯口長一氏宅法事

三十一・一日 出石町内報恩講日程(十月分)

三十二・三十一日 長寿寺

三十三・三十一日 真覚寺

三十四・三十一日 西方寺

三十五・三十一日 善立寺

三十六・三十一日

三十七・三十一日

三十八・九日

三十九・三十一日

四十日

四十一・一日

四十二・二日

四十三・三日

四十四・四日

四十五・五日

四十六・六日

四十七・七日

人生の先端でありお念佛の道の先達であるご門
徒のお年寄りと、年に一度でも共々におみのりを
聞き勵まし合いたいと始めさせていたゞいたこの
報恩講です。いつものようにバスがお迎えに参
ります。仏婦で心から「おとき」も用意しま
す。

人生の先端でありお念佛の道の先達であるご門
徒のお年寄りと、年に一度でも共々におみのりを
聞き勵まし合いたいと始めさせていたゞいたこの
報恩講です。いつものようにバスがお迎えに参
ります。仏婦で心から「おとき」も用意しま
す。



勝林寺 テレホン法話 開局



出石五八〇〇番

お宅の電話の受話機をとつてそのまま出石局（〇一九六五二）の五八〇〇をダイヤルしてみてください。

ちょうど一七七とダイヤルすると「はい、あなたの方の明日の天気は快晴ですよ」と天気予報が聞こえてくるように「こちら、勝林寺のテレホン法話です」という具合に短い（約二分三十秒）の法話が入ってきます。

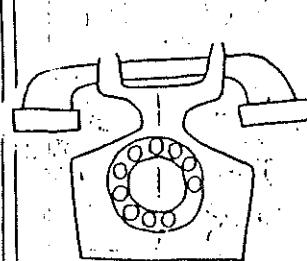
いつでも、全国どからでも聞いていたります。法話は毎月一日・十日・二十日と三回かわります。

「いいことだけど、しかし大変だぞ。どれだけ続けられることか」と案じてくださる方もあります。

また、「どんな人がどんな思ひから聞いてくださるのかわからぬままに、いわゆる不特定多数の人に向けての話なんて本当にできるのか」と忠告してくださる人もあります。

みんなほんとにごもつともな心配です。いえ、人様から言われるまでもなくこの私が不安に思つていることはそれなのです。

そしてその不安を一つも解決しないまま十月一日の開設日を迎えるとしております。



私はいま、こんなことを思いながらテレホン法話に取り組もうとしています。五十余年前に亡くなつた父（前前住職）の遺言です。

その時わたしは七歳。若手布教師として年中金国方々へ出かけたいた父が、病院へ最後にお別れに行つた私に次のことを申しました。

「大きくなつても寺をそとにくるような説教師になつてはならぬ。お説教するなら先ず寺のご門徒のお家でるのが本當だ。寺のご門徒が一番大事なのだ。それから、お説教というのはほとけ様だけがなさること。親鸞さまもそうだつたが、まして私たちに説教などできるわけはない。如来さまのことばやお祖師さまのみ教えを、人様に間違いなくお伝えしながら私自身聞かさせていただく以外にはない。間違つても寺をそとにする説教坊子にはなるな」

慈江の私は父が察した通りになりつづるような気がします。

いつでも、全國どからでも聞いていたります。

「いいことだけど、しかし大変だぞ。どれだけ続けられることか」と案じてくださる方もあります。

また、「どんな人がどんな思ひから聞いてくださるのかわからぬままに、いわゆる不特定多数の人に向けての話なんて本当にできるのか」と忠告してくださる人もあります。

みんなほんとにごもつともな心配です。いえ、人様から言われるまでもなくこの私が不安に思つていることはそれなのです。

そしてその不安を一つも解決しないまま十月一日の開設日を迎えるとしております。

信 心

夜が明けて

陽がのぼるのではない

夜があがつて

夜の闇が晴れるのだ。



「縁」ということ

「一樹の蔭にやどり一河の流れをくむも多生の縁」とか「そでふり合わすも多生の縁」などと使われている「縁」。それはすでに日常語としてふんだんに使われております。「この度の良縁」とか「夫婦の縁」とか

この「縁」といふことは、もともと仏教ではその教理をあらわす大切なことですが、それはともかく「縁」という漢字はとても意味深い字です。

「縁」という字は糸という字と象といつくりから出来ています。

「糸」という字の示すものはわかり切つおりますが「糸」というつくりの方を辞典でしらべてみました。するとこの字は、布のふちが垂れ下つていることを示す字で「端」という字と同じ意味だといふことがわかりました。布だけではなく屋根の端すなわち「ひさし」を指す場合も使う字だそうです。

ものはしつこの垂れ下つてゐるところ、屋根の両方のひさしということは、とうてい合うはずのないプラスとマイナスということです。屋根のひさしが出合つたら家はつぶれてしまいます。

そういう意味をもつた字に糸がついているので面白いではありませんか、「縁」という字はだから、へんとつくりと合わせたら、「とうてい合

うはずのないものを結びつけている不思議な糸」ということになります。しかし、この縁が、ほんとの縁になるのはなかなかのことです。二人の若い夫婦には、まだまだそんな不思議さなど見なさいというのが無理です。

若い二人は、自分たちの出会いをはつりと割切つたかたちで納得しているはずです。○○さんの仲人で何日何時に見合いして、どこをデートして、そしてこのように結ばれたのだと。

それはそれで結構なことです。しかし、その夫婦が二十年三十年と苦楽を共にしてゆくうちに、だんだんそれは思えなくなつてしまします。そこでほんとの夫婦ができます。四十年もすぎてしまつたあの日、A子おばあさんはつくづく思うのです。「ほんとに不思議だわ。男も多いこの世の中に、私はどうしてこの人と四十年もくらしてきただろう。あきもしないで」B夫じいさんもすつかり老いこんだばあさんをかえりみて同じように思うのです。「不思議だなあ随分と苦労かけたのに。どうして四十年もくらせたんだろう」

考えれば考えるほどこれ程の不思議はない二人が互に思いはじめたとき、その不思議さのなかで「ほんとの夫婦の出会い」があるのではないかでしょうか。

「とうてい一つになるはずのないものを結ぶ糸」の不思議さをA子さんとB夫さんが互いに思い合われる将来のお二人の日のために心からの祝福をおくりたいと思います。

(ある結婚式での祝辞)

